

2011年 10月11日・読売新聞「文化」欄では

時評一詩 戦争の影 死者への哀惜

樋口 伸子

〈時がすぎたから
見えなくなるものはある
はじめから見えていないものだって
たまご屋さん
その見事な球形
戦があっているときも
終わっていても〉(全行)

まずは長崎の『山田かん全詩集』(コールサック社)。氏は終生原爆を考えた詩人だが、被爆体験に根ざそうが、迂回しようが、詩の輝きを放つ。冒頭の引用詩「時が……」はそのことをよく示す。

彼の詩的出発は、戦後の困窮に身を寄せあつて生きた妹琇子への哀悼集である。21歳で自死した妹の苦悩はそのまゝ兄の悔恨となり、それらの詩はガリ版刷り詩集『いのちの火』にまとめられた。

田中俊廣氏の解説によれば、同詩集は後のどのアンソロジーにも再録されず、〈それほど愛しさと死なせてしまった悔恨を、この一冊に込める思いは深かったのだろう〉と。

〈耐える琇子／黒曜石の／つぶらな眸よ／八歳にはじまる／永い日々／どのような／不毛の砂漠を／君の眸は／宿してしまったのか(「死」全行)〉

よく「怒りの広島、祈りの長崎」と両県の相違が語られる。私が前に瞳目したのは、『長崎原爆・論集』で氏が故永井隆博士の功罪を厳しく論じたことだ。骨太の反戦訴えは彼の詩の一貫した柱だった。

しかし、彼には大変事の度になだれ出る安易な詩に苦々しさを表す「書かない」という詩もある。現在の状況と詩をどう考えるだろうか。

と紹介されています。